

研究通信

No. 27

昭和八年6月刊
村落研究会会報局

豊橋市町田町
愛知大学
社会学研究室内

社会学における二、三の問題について

——一九五八年村研大会感想として——

(北海道) 布施 漢 治

こゝで私が述べることは、昨年の村研大会、とくに感想討論の要
感した二、三の問題の要諦にすぎない。

第一日の研究発表、第二日のシンポジウム「戦後農村の発展」
のあとの総括討論会においては、まず経済学と社会学との交流に關
する基本的観点についての論議が、ついで、具体的に交際を上げて
いる農村、とくに部落の構造的変化に論点が集めた。第一の経済
学と社会学の交流に關する論争は充分に行われたと言ひ難い。し
かし結果的に、ついで行われた具体的に交際を上げていく各部落の
突例の報告が、今後の村落研究の将来に対して、きわめて豊かな成
果を予感せしめた。

村落研究における経済学と社会学の交流の問題は、シンポジウ
ムにおける後藤和夫氏の問題提起、戦後における村落社会構造の変
容、に關聯して矢木明夫氏から提出され、それは總括討論において
更に展開せられた。喜多野清一氏は討論展開のため導入として、
自らの所感を経済学と社会学の交流に關し、この交流は自明のこと
であるとし、「この両者のからみ合う場面として部落という一つの
地域社会をとりあげ、日本農村社会の中における構造的な諸問題の交
化過程、内部構造の変化過程を問題とし、それに關する諸々の原因、

とくに経済的諸問題を論ずる形をとるならば、両者の側からの意見も
ひやうやく、一つのまとまった経路もできる」と述べた。二、三の討
論のあと日田氏はシンポジウムの際における一部の発言者の発
言に、経済関係を単に外的な要因としてのみとらえるという欠陥が
あるとして「経済関係を単に外部からの資本主義の影響という外的
要因としてのみみるのではなく、ムラの中、イエの中での経済関係
(生産関係、流通関係、消費関係の三者を含むが、とくに生産上の人
間関係に重点をおく。)としてつかまねばならず、それがまた結局
は社会学自身の問題とも連なる」と述べ、後藤氏の問題提起に言及
して、「寄生地主体制を基本にしての村落構造の類型化をいわず土
地所有の關係に限って問題にしたが、寧ろ、その土地という生産手
法を使って人間が如何なる労働関係を結ぶかという問題も当然大き
な問題である」とし、経済関係を内的要因としてとりあげることの
重要性を社会学自身の問題として提示した。この場合、商品経済は
つねに生産、流通、消費上における人間の社会関係を伴って現象す
るものであり、この意味で経済学は人間の社会関係のうちの一部分
をとりあつかうのであるから、当然社会学と共通する部分がある
という前提が横たわる。

村落共同体内における人間関係を生産関係を媒介として問題とす
るということは、日田氏の指摘をまつまでもなく必要ならざるである
が、経済学と社会学の交流という問題は村落共同体内における社会
関係をとりあつかう科学として単に共通の部分をとるにもちあうと
いう以上のものでなければならぬ。すなわち、そこには、村落共
同体とらえる際の対象のちがいがら導出される両者の方法上にお
ける特色を自覚した上での交流がなければならぬ。かゝる従来の
方法論の自覚の上になつた交流の結果からは、村落共同体の科学
でも扱われるべきものを私たちは期待できるが、単なる野合から
後それは期待できない。このような意味において、自らの立つ学問
的方法に對しての峻厳な態度がのぞまれるわけだが、この論争はそ
の後、理論的には展開されず、具体的に交際を上げる農村の豊高
を致すの实例をもつて応えられた。

両者の交流はもはや自明のこととも知れない。しかしこのとき、社会学の側から理論的な統一の見解がなされなかつたという事実に何より私たちは目を向けなければならぬ。

そしてかゝる社会学における統一的方法論の虚弱こそが、「社会学的という嘲笑」を自ら呼びよす原因になっているという事実を指摘したい。私にはここに村落共同社会を日本資本主義社会に歴史的に位置づける際に混乱が生じているように思われる。これは従来社会学理論の歴史的な性格から脱却せんとする試みのための混沌ともいえる。ここにあらためて述べるまでもなく、社会学における村落共同体の把握は、鈴木栄太郎氏の「農民団の重積地区としての地域的統一」とも自覚的な社会規範を有する自然村概念を中心とした方法、有賀喜左三門氏の「愛道舎の概念を中心とした方法」、さらには福武直氏の「組織論、同族結合」という村落における家結合の別による先進・後進の二類型による把握などをとちしてすゝめられてきているが、これらは社会学における村落共同体の歴史的把握の発展段階をもしめしている。いまこれらを詳細に検討する余裕はない。たゞ、今後、村落共同把握のためには必要と思われる二、三の点に關し、問題のみ提示したい。

① 社会学の對象とする領域が村落共同体の経済關係である限り、社会学における對象は村落共同体内の社会關係であり、それは経済關係といわれるべき關係を内包している。その意味で生産關係を含むところの社会關係を問題とするとき、そこには對象範圍の決定の

ちがいが當然にもたらさるる経済學とは異なる方法が生じてくる。

② 例へば鈴木栄太郎氏を例にとれば、その自然村概念は、諸農団の重積的地域的統一とその地域的統一が有する社会意識の独立した統一的作用に對して村落共同体の把握であり、村落における生産關係も具体的には、この概念の欠陥として、階級支配という考えが欠陥していること、従つてこの中からは村落共同体の發展要因を説明し得ない、ことなどが指摘されている。けれどもそれにも拘らず、村落共同体における階級支配は具体的に、自然村という基本的生活の枠組の中での地位として階級を定むべきであるといふことも事實であり、この考えの中に共学すべき多くのものを含んでいる。

③ 例へば、社会学における村落構造の把握は次のように考えられてもよいと思は思つてゐる。すなわち、村落における人間關係の構造は早に生産・流通・消費の關係を基軸としてみられる以上、これらの諸過程を貫いてゐる生活の枠組とそれを規制している共同体的規制という観点からとらえるべきだと思ふ。例へば、経済的規制、という形で説明される現象は、封建的人間關係とよく前に、ひとまずそれを可能にしてゐる村落における生活の仕組や、日常の生活の論理をときどきくづつて、その中から、この村落の社会關係の枠づけをしよとする。またこゝろの論理もある。それは村落における人々の生活と規制との、例へば、経済的規制、という形で説明

つたり、生活圏が拡大して行つたりする側面である。これらの生活の枠組の変化が共同体となつて、生活の中にくみ入れられてくる。日本資本主義社会の中におけるこれらの現象の發展形態の中には如何なる法則性が存するのだからか？村落における生きた歴史的な生活の枠組としての社会關係の型の發展法則については、いまだに知られていないが、

多くのことがある。鈴木氏はその自然村概念を提示した、農村社会学風潮において、それが「現時の日本農村の基礎的社會構造及び階級に關する組織的研究」であることも述べられている。鈴木氏の立論のウィーバー・ポインツのある階級制支配に關する側面に對する点に於いては、階級社会学の学ぶべき多くのものを要取しなければならぬが、これと構造的階級をもつ行政的地域集團といわれるもの、氏子集團といわれるもの、種中集團、近隣集團、経済的集團、官設的集團、血縁的集團といわれるべきもの、皆本的構造は具体的に如何なる変化を示しているのか、これらを規制するタイプの社会意識は如何なる形で変化し、これらの現象の法則として如何なるものを提示できるのか？日本資本主義社会の特殊性は、すでに概念的な枠組として外から与えられているのではなく、あくまでも人間の社会關係の型の変化として村落共同社会の中に与えられている。

④ 特定の村落共同体の社会關係の型を歴史的に位置づける際に、その説明を生産階級關係に於けるべきである。それ自身必要なく

でありあやまりではない。けれどもそれは現象の構造説明の一つのおきかえにすぎない場合がしばしばある。その前にまずなされなければならないことがある。つまり隣接諸科学の成果の上に準拠しつゝ行われる一つのおきかえ的操作という方法以上に、更に、生産関係の変化をその中に含みつゝこれによつて規制され、またこれを規制している社会関係の型の発展の法則を、生活の枠組の変化として、また共同体的規制の変化としてとらえるべく努力すべきであつて、また、社会関係の型を生産関係との関係で説明しようとする場合、後者はたゞ単に説明概念としてのみ用いられるべきではない。その相互に規定しあふ複雑な相互作用の法則の解明とでも言われるべきものに注意をむけるべきであると思ふ。

一 ばんにかゝる側面からする村落共同体的把握は、きわめて立廻れを示しているが、これを克服するためには隣接諸科学から多くの成果を半ぶるとも、社会学の諸理論の種々の先駆的業績にも多くのものを半ばなければならぬことをここに強調したい。

私は非常に素雑な形で問題点のみを提出したが、更に立ち上つた検討と、実証により問題を深めたい。

討論

一九五七年大会の

総括討論会総感

(報告) 島田 隆

「シムボジウム」の開催場所につゞく各論討論では経済学的な「バックグランド」をとりあげての意見が多かつたようであるから、総括討論においては、それを家と家組合、部落に結びつけて考えよう」という司会者の意向は必ずしも十分に実現されたとはいへない。

討論の話題は戦後農村の変貌にしろられ、まず、個人単位たるべし組合が實質的にはまだ単単位制を保ちつゝそれでも官僚的な指導者の擴張がみられる山村大等、協同組合の商品作物の選果ですら旧来の部落組織に依存する苗山、同じ商品生産物といつても価格変動の大きいもの(たとえば花作り)の生産販売において旧来の組織、指導者の変化がみられる仙台南市内、戦後盛産の畑作物が水田村に對して変化をみせる大塚近郊などの例が論じられ、ついで町村合併に伴う部落形態の変化について各地の例が報告された。これで、地域による差異、また視座のちがひや分析の視点はあるとしても、普遍的なものが変化しつつある戦後農村社会の姿態が知られた。

それについて、漁業や農業の協同組合がまだ家単位であるのが顕例だとしても、その家の内部の個人が、戦後の経済や政治などの条件によつて、どの程度上の生産形態に変化してき

たか、したがつてまた家そのものの内容がどう変つたかということ、つまり戦後の家の存在条件とその形態について、もっと立ち入った議論が概しかつた。これというのものも、各学問分野で、その種の精密な研究がまだ進んでいないためであるうか。そうとすれば、各地で一斉に着手しなければならぬ問題であるう。

このことは、ひいては家連合やいわゆる部落組織という形の残存度の問題につながる。本来個人単位たるべき近代的な組合組織が、家連合や部落の形をよまえていゝといつても、これらを構成する家や個人の変化もあるのだから、その意味は現段階の条件に支えられた新しいものであるう。

右のような線で実態をこまかく追求することが、さきほどの司会者の意向に沿うゆえんであるう。それにつけても、明治二、三〇年代に、日本資本主義が確立したものとすれば、その後は少くとも理論的には個人本位の生活形態が優越するはずである。だから家や村という視座から日本近代社会を見るだけでなく、逆に個人を中心据えて、その生活範囲の限度の変化を見きわめていくという方法も、積極的にとられてよい。この二つのやり方は、いずれは同じことなのであるが、とくに近代の生活形態をその諸条件に即して考へるには、後者のやり方を意識的にとりあげることが必要であるう。

さらに、討論でもしばしば使われ、町村合併と選挙との関係の條にも問題になつた、いわゆる部落なるものの概念については、討論

中にすでに注意されたように、部落とはなにかをもう一度反省しなおす必要がある。実はこれらはいずれも今年度大会の際「村落共同体」の規定につながるものであるから、そのときに少しでも収獲を得て前進したものである。

一つの視角

(大阪) 中島龍太郎

世話役の一人として、昨年度大会は予想以上にうまくいったと思つています。これは開催地が東京で参会者を得やすかったこと特に北海道・東北などから多数の参加をみたこと、いさゝかな問題に対する発言が活潑であつたこと、両会者の努力等によるところが大であります。第一日の研究発表は予定どおりに進みましたが、例年より発表者が多かつたため報告者に整理をさせたようであり、特に中野氏の大香の漁村の報告などは、もっと時間をかけて充分論議を徹底させていたたく機会を持ちたいと思ひました。第二日のシンポジウムも初めての試みとしては先ず先ずで、特に東北地方の農村の型による生産構造の報告(我孫子氏)は個人的に教えられるところが大きでありました。両日の報告を通じて問題が多岐にあつたため、その全容は年報をまとなければなりません。議論の中心は生産構造と部落(定説)の関係ないし村落共同体の

結び付きにおかれ、これを規定する要因として家族及び縁組、農業化と過剰労働力、土地所有と農業労働、農業経営の型と市場、技術との結びつき、農民意識と倫理体系等が戦後の各地域を例にとつて説明されたといつてもよいであらうでしょう。これらの問題中特に第二日の討論を傍聴して感じたのは、最近の農村の変化において、農業化乃至分業化の傾向が深々にはあるが縁組を骨子とする旧部落構造を變質させ、行政権力の村落支配の再編成(町村合併と農協団体の改組)に照して新たな形をもつてきたのではないかという点であります。

農業化乃至分業化については、昨年度大会の年報課題として提案された「共同体的な一視点として指摘(山室厚幸氏)」されたところであり、(昨年度研究報告)も、第二日の討論でもこれに際接関係する発言が多かつたようです。特に農業化の問題については、従来は農業労働力の農外移出の形態として、また農外所得の増進ないし農業と他産業の結び付きにおいて述べて論ぜられ、シムボシウムの発言(岡本氏)でものべられたように、部落構造と村落共同体との関係では充分尽くされなかつたと思ひます。しかしこの型の問題がすでに幾度か論議の対象になつた例は、農民運動における給与者同盟や農村外からの転入者、郷村者等の活動として、また、農業が家や部落の中へどのような役割の分化を持ちこんでいるかの問題提起として示されてきたところであり、特にシムボシウムの発言の中からは、

(1) 組合や農協団体の役員、活動家の職能分化と新しい型の指導者の擡頭(大香漁村の組合について)中野氏、仙合近郊の農業、花つくりの組合について)竹内氏、乳牛飼育技術の導入を説とする研究グループについて(常盤氏)

(2) 農業町村合併等による部落、村のリーダーシップの構造変化による役員者やリーダーの性格と役割の変化(区長、議員の役割や出し方の変化)陳訪園、喜多野、植武、遠崎、田野崎氏)

自体的な形質としての特徴をもつてはそれ村の構造を交差しつゝあることが予想されます。もっともいくつかに分類される村落支配の原型が家の結びつきとして行われ、リーダーとの者に大きな変化は認められないという事実も依然多く認められるでしょうし、その組合リーダーを交えてある意識と変化に対するその適応性がリーダーとの対比において改めて問われるべきでしょう。

とにかく農業や分業や中間化が家や村落の内閣構造を動かす力となりつゝあること、それが政治権力や市場や労働運動との結び付きにおいて村落支配の一つのルートをつくりつゝあること、更にそれが部落や家直令の共同体的規範がある場合には利用しつゝ、漸次解体せしめつゝあること、こういつた一連の変化を当日の報告から感じとつたわけですが、この線にそつて本年の共通課題と取りくんで見たいと思つてゐる次第です。

本年の大会を前に

(福岡) 原 宏

最近、大牟田良「ものいねの農民」を讀んで深い感銘をうけた。あたかも著者に連れられて、岩手の村々を廻り、或時は農家の掃先で、或時は相俣で農民からじかに話しかけられて、或時は切切と慕える著者の感慨をそれ自身で巧まざる芸術でさえある。三月二十四日、内山政原氏が朝日新聞に寄稿した「農民の発見」の中でいっているような農民の發見を廻りあてた作品とは、まさにこんな著書ではないだろうか。そして村著研究を志すものにとつても好例のサイド・ブックたる役割を十分に果してくれると思う。

又折によれて村を歩き、村人の話に耳を傾けることも村著研究には欠くことのできないことだと思ふ。昔を遠ざかり鳴子の山嶽に會員が一夜を語りあかす樂いは、それ自身一つのフィールド・ワークのようなものである。恐らく大学の教養で聞く村落社会研究会とは異つたエッセンスが生れるのではなからうか。ただ宿泊費がいくら安くついても、東京まで大して遠くないといふ訳にはいかなさう。手許の池田を開いてみたが、矢張り九州から東北までは遠い、どうしても東京で乗り継がねばならない、これが極めて厄介である。

そこで、東京も遠くも廻り廻して行くからには、ついでといふではあるが新だが(遠くまでも大会参加の調練物として)鳴子での会が終つた後、幾つかの村でできることなら既に村落社会研究論文の資料となつてゐるような村を歩いて、なるべく生活する農民の姿——論文のバックとなつてゐるような農民の姿——をカメラに収め七來たいと思つてゐる。

「ものいねの農民」の北上の山嶽であつたそれとも南限の山嶽に北上の山嶽なのか、まだそこまでは考へてゐない。もう一つの宿望はこけしの作者を訪れてみたい——鳴子の高橋盛、同じく武男、作並の平賀謙次郎、本地山の藤田、遠刈田の好秋……——といつた人達をたずねてみたい。そして私の著書に影つてゐるこけしの仲間の夜をよやしてやりたい。しかし、あれもこれも時間と金銭のことはあるが。

年報および編輯委員会記事

四月三十日、東京本館において在京委員会が開かれ、年報編修及び秋の大会についての諸議が次の上に行われた。今回は各大学の行庫等で欠席者があり、有賀、小池、福沢、松原、中野が出席した。去年の大会に於ける前回の録音テープが、2号録音でできてゐたことにつき、特刊号刊行は断念せざるをえないが、録音できた1号の記録が、事務局の精励力で勝手版刷りに

なつて委員会(事務局)に預けていたもので、これをどのように生かすことができるかが幾何に論議された。やはり、これをそのまま保持しても所切れたトンボでむつかしからうから、むしろ、これを投稿を依頼しようとする人々へお送りして、それに関連して、或は特に関連したものでなくてもよいが、原稿をもとめろまかけとして活用できるのではないかと、いう考案に一致した。

次に、事務局輪番制の意義が、担当事務局の創設ある企画によつて、交替あることに新設な村研運営を期待するところにあること、在京委員会は何等「本部」的存在ではなく、たんに年報委員会、編輯委員会、それが東京で行われるにしても、それらは年報編修、共同課題研究に関する討議の必要がある除にのみ開かれるにすぎないから、事務局は村研全体の活動、また平常の研究連絡機関たる「通信」編修を独自の企画で進めていただくものである点が再確認され強調された。(今回も在京委員会はテープのコピー一部送附をお願ひしたところ、事務局ではガリ刷にしてあちこちに送り投稿を求めるといふ方法を既にとつておられたことが、この委員会のすんだ翌日の連絡によつて判明した。

年報編修については、執筆依頼先に關し未定であつた地理学、歴史学の研究動向執筆者が、地理学については木内信雄氏の紹介をえて矢野仁吉氏に確定、歴史学は佐々木誠之介氏にきまつた。また、切は六月末までの五月中に再度執筆促進依頼の連絡をすることとなつた。

最も主要な議題は秋の大会に開する点であつた。

開催地について去年の総会で鳴子温泉「農民の家」とする意見が出て支持も多かったがこれが第一案として考えられるが、関西以西の人々には遠距離すぎるという意見もありうると思われるので、第二案としては東京でということも考えに入れて、開催日時等と合せてアンケートを出してみてもどうかということとなつた。

(1) 開催地は東北と東京のいずれを可とするが、但し、東北の場合、鳴子温泉のほか「郵政省関係」の施設借借も考えられる。(これらについて竹内利美氏より会場や宿泊の条件、費用等につき村研通信に投稿を求めてほしい。)

(2) 東北で大会を開く場合は泊り込みであるため夜に入っても議論を続けることができるといふ魅力があり、宿泊も三、四百円で一泊できるし、汽車賃も、遠くから来る會員の場合、東京でやるのと大差がない。運搬ないし回遊切符という方法で安く上げることと可能である。

(3) 大会の日取りは十月とするが、日本社会学会大会が同じ月に東京であるので、これにも参加する人々の都合をも考え、東北でやる場合は、社会学会が土、日にあるからその後一日置いて火、水に村研大会を行う。村研大会をも東京でやるという場合は、社会学会(土、日)の前一日置いて、水、木に行う。日本社会学会の日取りについてはその開催校である中央大学になるべく早く

問合せ、それとの問題によつて前記のよう村研大会の日も、また二日、

(4) 或は、もしその希望が多ければ日本社会学会大会との日取りを全く離れた時期とする。再度旅費を要することを多くの人が差支えないとされた場合は、(8)の方法をとらない。

(5) 以上の開催地等に關して會員全てにアンケートする。経費の關係でハガキ封入はしないでもよい。なお、アンケートには共同課題は去年の総会で済ましたように「共同体」であるが、その研究報告希望の有無を問うと共に、報告希望の場合そのテーマ(簡単に内容を略すもの)であればよ(5)も書き添えてほしい。

(6) また、そのアンケートで、「共同体」をどのような視角でとりあげ、何をどのように論議するかという具体的な希望を會員から提案してもらふ。以上は村研通信の記事として載せる。(多すぎれば要約しても類型別に紹介してもよい。)そして、課題委員会はそれにもとづいて去秋大会の計画をさらに具体化するに努める。

新 会 員 紹 介

佐々木 義典 農林省

青森県五所川原市野田四七 農林省十

三浦千穂建設事務所内

角 節郎氏 自治大、
京都市東山区山崎町一七 京都市

告 知 板

◎今年度大会開催地及び時期について
右について既に往復ハガキで會員各位にアンケートを求めてあります。何卒至急御返償下さい。なお、課題委員書記簿にありまうに、共同課題「共同体」に關する各位の御意見を是非とも事務局までお知らせ下さい。
◎その後の会費納入者
三二年度までの会費についてさきに御協力下さるようお願いしました結果、多数の方々から御送金を頂きました。なお現在未納の方々もよろしく御協力の御お願い致します。

- (1) 昭和三一年度会費納入者(四月一日以降) 井藤睦平、甲田和衛、丸山学、茶山桂三、
- (2) 昭和三二年度会費納入者 池上広正、井藤睦平、内山政照、大山彦一、堀口貞幸、甲田和衛、齊藤兵市、鈴木栄太郎、丸山学、宮本常一、谷口澄夫、矢島武、山田敬道、中島實雄、米山桂三、堀岡勳
- (3) 昭和三三年度会費納入者 中島實雄

◎住所変更

中島實雄 釧路市常見町九一―一五 北海道
宇釜大学見晴寮内

今年度大会を成功させるために!!!

研究報告用原稿をお願ひいたします。
特に共同課題に關するものを歓迎します。
締切は七月十日、下旬に発行の予定です。
送先 豊橋市町研通信知大社会学部研究
室内村研研究会事務局宛